

文学作品における派生形容詞「くっぽい」

藍っぽい

○秩父銘撰の藍ぽい羽織を着て、下は瓦斯絲らしい。「尾崎紅葉・多情多恨・前編三六⑰」

青っぽい

○青っぽいカンテラの光が揺れるたびにゴミゴミとした棚の一部や脛の長い防水ゴム靴や支柱に掛けてあるドサや裃天、それに行き先などの一部がチラ、チラッと光って消えた。「小林多喜二『蟹工船』二四⑩」

○演説者は、青っぽいくすんだ色のセルに、黄色の角帯をキチンと締めた、風采のよい、見たところ相当教養もありそうな四十男であった。「江戸川乱歩『白昼夢』一一⑧」

○少し青っぽくなるかもしれないけど。「干刈あがた「黄色い髪」六八⑮」

○鏡で見ると、頬の腫れは引いていたが、直美の言ったとおりの青っぽくなっていた。「干刈あがた「黄色い髪」七二②」

赤っぽい

○「赤っぽい、ひげの長いやつだろう」「安部公房『砂の女』二七⑧」

○寒いのに、コートは手に持ち、ジーンズに赤っぽいセーターを着て、こっちがお葬式の準備してるのに、うるちよろして邪魔だったんだよ。「加賀乙彦『湿原』下・星一一九⑯」

○田舎だけではない、フェズのような大都会でも、旧市街には赤っぽい灯りがポチポチ点くだけなんだ。「小川国夫『悲しみの港』六八」

赤茶っぽい

○史子に脱色の仕方を教えてくれた一人である彼女の髪も、明かりを吸って赤茶っぽく透けて見える。「干刈あがた「黄色い髪」二五六⑯」

垢っぽい □

飽きっぽい

○飽きっぽい彼は、三日目あたりになると、もう押入れの寝台にも興味がなくなって、所在なさに、その壁や、寝ながら手の届く天井板に、落書きなどをしていましたが、ふと気がつくのと、ちょうど頭の上の一枚の天井板が、釘を打ち忘れたのか、なんだかフカフカと動くようなのです。「江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』一五二⑧」

○……雪森厚夫という男の性格は、表面上は人当たりがよく、ちよつと理屈っぽいところが落ち着いて見え、初めは善人で学校の先生みたいに思われて信用されるのですが、元来飽きっぽく気が変りやすいのです。「加賀乙彦『湿原』上・闇 三九二⑱」

悪っぽい □

浅っぽい「徳富蘆花「思出の記」

汗っぽい

○家の中においても隣の家の話し声がどうかすると聞こえたりする。それは丁度動物同士肌をすり合わせる汗っぽい感じに似ていた。「大庭みな子『がらくた博物館』」

あだけっばい」]

あだっばい

○その人工の漆黒な眉は、小づくりな童顔の中で浮きあがっていて、まち子姐さんの面だちを実際よりもあだっばくみせてしまう。「宮本輝『道頓堀川』五④」

仇っばい

「何だかまだ芝居に居るような気がして相済まないけど」とお糸さんが煙草を吸付けてフウと烟を吹きながら、「伯母さんの小言が台詞に聞えたり何かして、どんなに可笑しいでしょう」と微笑したところは、美しいというよりは仇っばくて、男殺しというのはこういう人を謂うのかと思われた。「二葉亭四迷『平凡』一三七③」

婀娜っばい

○ここでは酒を般若湯という。然もそうした家の主人はというと、まだ二十三歳の婀娜っばい美人なのだから驚かされる。――「森銑三『明治東京逸聞史』趣味四一・六」

厚っばい」]

あぶらっばい

○あたりにはサンダル、眼鏡、茶碗、箸などがころがり、あぶらっばいような、淫らなような匂いがねっとりよどんでいた。「開高健『夏の闇』一一六⑩」

脂っばい

○私たちは毎日顔をあわせ、酒場の椅子に埋没して酒をすすりつつ、道をいく女たちの眼や腰を眺めて放埒な冗談をとばして脂っばく笑ってばかりいた。「開高健『夏の闇』八六⑨」
○ひねったり、つねったり、集めたり、こねたりして頬をのぞくと、中年男の顔は脂っばく

て蒼白いもやもやである。「開高健『夏の闇』九八⑪」

○ショーウインドウというショーウインドウは淵の暗さがあらわれるまで磨きこまれ、その奥で脂っばい頬が閃いたり、ゆっくりと影がうごいたりする。「開高健『夏の闇』九三⑤」

○私は脂っばい、大きな袋に封じこめられ、顔をねっとりした脂と汗で蔽われてソファかヤクの皮にころがっている。「開高健『夏の闇』九七⑬」

○タバコの吸殻などが刺さったりしている脂っばい肉や魚の冷めきった残飯からたちのぼってくるものであるはずだ。「開高健『夏の闇』一四六⑪」

○担架は血と汗と垢で黒く脂っばく光り、厚布というよりはしたたかに使いこまれた革のような光沢で光っている。「開高健『怪物と爪楊枝』二四一⑧」

荒っばい

○結婚しよう。どんな大きな悲哀がそのために後からやって来てもよい、荒っばいほどの大きな歓楽を、生涯に、いちどでいい……「太宰 治『人間失格』一〇五②」

○ごく荒っばい形でなら、地球の皆さんも成功したようですが、複雑な構造をもった物質をいきなりつくり出す技術は、まだまだ無理なんでしょう。「安部公房『無関係な死』七二⑧」

暴っばい

○先刻「さつき」番頭さんに云ふ通り、八右衛門と云ふ荷主が山口屋へ爲換「かわせ」を取りに往くと云ふから、少しでもさう云ふ事を聞いちやア打捨「うつちやつ」ちやア置けねいから、暴「あら」っばい仕事だが頭で突いて毒を服「の」ませ、生空「なまぞら」を遣「や」つて此方「こつち」の店へ来た所が、山出しの多助の畜生に見顯はされた上からは、私「わしや」ア繩にかゝつて出るのは承知サ。「三遊亭圓朝『鹽原多助一代記』一五〇上⑱」

あわれっぽい

○すなわち、世之介の質問に答えた飛子のアワレっぽい身の上話もデタラメの作り話なら、それに対する世之介の、いや実は自分も金性なのだ、という返答も（遊びの席での、とっさの、つき合いの）嘘なのではなからうか？「後藤明生『吉野大夫』一二五^⑮」

哀れっぽい

○家全体が、むりやり振じまげられたような、哀れっぽい悲鳴をあげた。「安部公房『砂の女』五一^②」

○仔犬は、つれて来られるまえから、かなり乱暴なあつかいをうけていたらしく、最初からいかにも哀れっぽい悲鳴をあげていた。「安部公房『無関係な死』一四五^④」

○二人とも繰り返して読んだ。ひどく哀れっぽいゆう子である。「幸田 文『きもの』三二八^⑬」

憐れっぽい

○「あんな憐れっぽい事をお言いだがね、あれでもとはずいぶん酷かったんだよ」「夏目漱石『こころ』一四〇^⑫」

いがらっぽい 「上司小剣「石川五右衛門の生立」」

○トウモロコシ葉からつくった紙で巻いた、いがらっぽい塩漬の黒葉のタバコをふかしながらそれらを眺めていると、さめたばかりなのにまたうとうととしてくる。「開高健『夏の闇』六^⑭」

○けれどいま、ラムの甘い匂いとタバコのいがらっぽい霧のなかでは、別れた日の遠景が小さく見えるだけである。「開高健『夏の闇』九^⑯」

○久瀬は汗にまみれて蚊帳のなかによこたわり、いがらっぽい黒葉の兵隊タバコに火をつけた。「開高健『岸辺の祭り』九二^⑧」

○この街道は広大なメコン・デルタとサイゴンをつなぐ大動脈で、交通量がもつとも多く、朝から夜まで、どの時刻にもいがらっぽい排気ガスと人声にみだされている。「開高健『怪物と爪柳枝』二二六^⑨」

○私はいがらっぽい兵隊タバコをふかしながら感動していた。「開高健『輝ける闇』六九^⑯」

○いがらっぽい海水のなかを泳いでいるさなかによく冷えた真水をもたらったようだった。「開高 健『花終わる闇』五五^⑦」

意地っぽい

いたずらっぽい

○彼女はいたずらっぽく微笑むと、あいつとふたりつきりになりたくないからだと言いました。「宮本 輝『錦繍』四一^⑭」

○早鐘の胸を隠して、アナはいたずらっぽく笑いました。「久美沙織『MOTHER』四三^⑱」

○「いや、そうであったのですよ」大貫検事は能勢警視に、いたずらっぽく片目を瞑ってみせた。「加賀乙彦『湿原』上・闇 四二四^⑥」

○眼をいたずらっぽく輝かせ、のびのびと自身にあふれ、まるで舟のようにどっしりしている。「開高健『夏の闇』六四^⑪」

○女はマーティニをすすって声にだして笑い、いたずらっぽく舌をだし、肩をすくめた。「開高健『夏の闇』二二九^⑰」

○女は組んでいた手をほどいて何となくあたり一带をさしてみせ、いたずらっぽく低い声で笑った。「開高健『夏の闇』一五八④」

○「あの橋の真ん中からこの店までの道を、マスターはいつも五十一から五十三までの間で歩いてくるんや」と邦彦がいたずらっぽく笑って言った。「宮本輝『道頓堀川』三五⑨」

○難波の地下鉄の駅の改札口の前で邦彦からリュックサックを受け取ると、由紀子はいたずらっぽく笑って、「こないだ、政夫さんからラブレター貰いましたん」「宮本輝『道頓堀川』二〇二⑩」

○彼女はいたずらっぽく微笑した。「川西 蘭『ルームメイト』二六二⑬」

悪戯っぽい
○マダムは唇に指を当て、悪戯っぽい眼で微笑みかけ、「この時季になると、ムササビがやって来て、屋根裏に巣、つくるの」と言い、耳を澄まして、天井裏を走っている足音を聴いてみると言う。「中上健次『軽蔑』」

○ここまで話した時、呉氏は悪戯っぽい笑みを浮かべて私の顔を窺った。「倉橋由美子『月の都』一五四⑱」

色っぽい

○なにか色っぽいことをはじめるのですよ。「江戸川乱歩『防空壕』三二八⑮」

○とてもそれとは勝負にならないまでも、なんとか少しは色っぽい返事がしたかったけれど生憎と信之には、全くなんの記憶も甦って来なかった。「多情仏心・初雪の夜、八九頁」

○「あら！」と寧ろ呆れた顔だったが、だんだんその色っぽい目のうちに、(まアこの人は、なんて子供らしいんだろう)とでも云った気持の、さも好もしげな笑(えみ)が浮かんで来た。

「多情仏心・初雪の夜、九一頁」

○詳しい話はどうとう出なかつたけれど、何か少しぐらい色っぽい場面もあったらしいから、その懐旧の情ですか。：：：「多情仏心・楽屋、一〇〇頁」

○一体男でも女でも、大勢のなかへ出て、なんとなく人目につくって云うような人なら、きつと色っぽい話が多いんですけど、紀尾井町さんは、どっちかと云やアくすんだ方でしょう？「多情仏心・楽屋、一一七頁」／一三二頁」

○彼はその男の風貌や人柄を想像して見て、通俗小説にでもありそうな一つの色っぽい出来事と場面を描いて見たりしていた。「徳田秋声『仮装人物』二五一⑫」

○(困ちやうな、もっと色っぽく化粧でもしたらいいのに……)「田辺聖子『風をください』一四四⑥」

○色っぺ。宙太は心の中で叫ぶ。「山浦弘靖『星子宙太二人旅』二四③」

浮かれっぽい
嘘っぽい

○他人の眼から見れば、どこか嘘っぽいか、あるいは思い込みにとらわれていて承服しがたい硬ばったものだからであろう。「大庭みな子『自分のむづかしさ』」

うたぐりっぽい

海っぽい

○それから予想外に、海っぽいタッチがあった。「吉本ばなな『N・P』一〇〇⑧」

恨みっぽい

○女の気持のわからない剣持の顔を恨みっぽく見ながら、聡子は自分で言うしかない。「天

藤さんに、身をまかせよと」「筒井康隆『朝のガスパー』79]

浮気っばい」

えがらっばい

○黒い影は折れて故(もと)の如く低くなる。えがらっばい咳(せき)が二つ三つ出る。「夏目漱石『虞美人草』二四五⑬」

Hっばい

○「なんか変よ、あの二人。……うわあーHっばい!!」「山浦弘靖『星子宙太二人旅』四〇④」

エロっばい

遠慮っばい

怒りっばい

○しかし加世子は怒りっばい庸三を、子供に直面させることを怖れて、いつも庸三を抑制した。「徳田秋声『仮装人物』二二④」

○ただ無暗に愚痴っばく、怒りっばくなくなり、なんでもないことに腹を立て怒って涙をながしたりすることが、おかしいと云えばおかしく感じられる程度だ。「安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑥」

○もつとも、怒りっばくくなっているのは父親も信太郎も、そうだった。「安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑭」

幼っばい」

男っばい

○埠頭の尖端を荒彫りに作った人形の立つ台も、男っばいものであった。「芝木好子「面影」

」

○それでいて男っばい頼り甲斐のあるところなんかを見抜いているかしら「田辺聖子『風をください』六七②」

○「そうね、善良そうな小父さま。頑丈で男っばくて……若いのね」「加賀乙彦『湿原』下・向日葵四二四⑥」

男の子っばい

○「変なところが変に男の子っばいのね。」「吉本ばなな『N・P』一六六⑫」

おとなっばい

○ロイドのまだ中性めいて華奢な横顔に、フツとおとなっばい鬚が浮かんだのです。「久美沙織『MOTHER』三九⑦」

○妹尾由加子は、同年齢の女生徒と比べると、笑い方も、歩き方も足の組み方も、あらゆる点で垢抜けておとなっばく見えました。「宮本 輝『錦繡』三七②」

○ロイドはしばらくばちばち瞬きをしていましたが、きりりとあげた顔つきは、なんだか急におとなっばくなくなっています。「久美沙織『MOTHER』一七二⑪」

大人っばい

○いきなりこんなことをされるなんて、仲間なはずのロイドがやけに大人っばい目つきになって自分を見るなんて、まったくショックです。「久美沙織『MOTHER』四三⑩」

○ただ元服した勘三郎が大人っばく正月の挨拶をして侍を悦ばせた。「遠藤周作『侍』三九九②」

○「吉川の言葉が大人っぽくひびいた。」「三浦綾子『塩狩峠』 六〇②」
お姉さんぽい

○詠子はやっと落ち着いたらしく、お姉さんぽい口調で聞いた。「干刈あがた「黄色い髪」
別人ごっこ二八三⑩」
女っぽい

○ちよつとだけ女っぽいところがあるだけ。「宮本輝『道頓堀川』一八〇①」

○懐かしい印象だったが、前会ったときよりずっと、女っぽい迫力に満ちていた。「吉本ば
なな『N・P』 四〇⑩」

○女っぽいふりしたり、強かったり、弱小だったり、大げんかして声をからした後並んで月
見たり、同じことしてゐるのに日によって感じたり感じなかったり。「吉本ばなな『N・P』一
五三⑫」

○「あんたって女っぽい性格してんね。顔も女っぽいと思ったけど……」。「山浦弘靖『星子
宙太二人旅』四九⑰」

○「ひゃーあお久しぶり！すっかり女っぽくなっちゃって。近よりがたいったらないわ。」

「吉本ばなな『キッチン』一二七⑧」

ガキっぽい

○私もすごくガキっぽいとこあると思うけど……」。「干刈あがた『黄色い髪』別人ごっこ

二八六⑰」

餓鬼っぽい

○こうした荒唐無稽な戦闘場面に遭遇し、武器を扱って敵をやつつけるなどという餓鬼っぽ

い遊びは久々のことだ。「筒井康隆『朝のガスパール』朝日新聞一九九一年一月二日（月）
付」

学生っぽい

○というような学生っぽい言い方はしないのである。「田辺聖子『風をください』一三五⑮」

隠れ家っぽい

○しかしどことなく暗くさびれていて、隠れ家っぽい感じがした。「吉本ばなな『N・P』

九九⑪」

影っぽい □

かしよっぽい □

風っぽい □

軽っぽい □

感じっぽい

○おまえさんは感じっぽい子だから、いろいろ思うだろうけれど、今お母さんは病人だから
ね。病人を相手にして、るつ子のほうが先に感じっぽくなっていたんじや、話にならない。こ
の着物も紐も、あしたはさらっと着せなければいけないよ。「幸田 文『きもの』一四一⑥」

○るつ子は持前の感じっぽさ、感覚の強さで、火の穴から這いあがろうとする脚に、ひらひ
らするものまつわる感じを想像し、そのおそろしさにふるえ、布裂「ぬのきれ」が皮膚へ残っ
た考えると、胸ぐるしくなった。「幸田文『きもの』一五五⑦」

黄色っぽい

○何しろ、胸はむかつくし、目の前にはなんだか黄色ッぽいものがもやもやしているし、大

苦しみの最中で、はつきりとは憶えてませんが、……そうですか、その時にあなたもいらしやっただんですか」「多情仏心・初雪の夜、九〇頁」

○カサカサに乾いた黄色っぽい肌、絶えず聞こえる軽いせき。「三浦綾子『塩狩峠』二五八⑩」

○黄色っぽいくつやのないまなざしを漁夫の上にじっと置いて黙っていた。「小林多喜二『蟹工船』一三⑭」

○壁は黄色っぽく塗られ、塗料をすかして無数の落書があるのが分る。「加賀乙彦『湿原』上・壁四六二①」

キザッぽい

○「高原のリゾートエクスプレス」というのだそうだが、そのキザッぽい名に恥じないゴージャスな雰囲気は、ヨーロッパのリゾート列車の風格がある。「内田康夫『湯布院殺人事件』六七⑯」

気障っぽい

○それは可かったけれど、お酒飲みだすと、あの人の態度何だか気障っぽくて、私忿って廊下へ飛び出しちゃったものの。＜葉子の会話＞「徳田秋声『仮装人物』一四六⑮」

○ロイドは気障っぽく肩をすくめました。「久美沙織『MOTHER』二五二⑬」

金属っぽい

○しばらくじっと眼をこらすと、どれもみな同じ、だいたいお皿をひっくり返したような形の金属っぽい物体であることがはつきりわかりました。「久美沙織『MOTHER』一一一⑩」

ぐちっぽい

○これはぐちっぽい老人たちがあとで不首尾のときにいいがかりをつけてくることを防ぐ効果をもつはずだ。「開高健『巨人と玩具』九六⑬」

愚痴っぽい

○ただ無暗に愚痴っぽく、怒りっぽくなり、なんでもないことに腹を立て怒って涙をながしたりすることが、おかしいと云えばおかしく感じられる程度だ。「安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑥」

くろっぽい

○アルバムをめくっていると突然、変にくろっぽい、陰影の濃い一葉の写真にぶつかる。「安岡章太郎『海辺の光景』三四⑰」

黒っぽい

○小男は黒っぽい舌の先を、唇の端にかるくすべらせ、喉の奥でおかしそうに笑った。「安部公房『無関係な死』二六⑭」

○黒っぽい荒れ海だが、水平線のあたりから白い帯が伸びて、川のように蛇行しつつ間近かまで来ていた。「加賀乙彦『湿原』上・流水二八四⑪」

○橋を渡る。荒川にかかった千住新橋だ。むこう岸に、黒っぽい異様な建造物が見えた。「加賀乙彦『湿原』上・壁 五一六⑥」

○黒っぽい背広を着て頬と顎がひげで埋っている。「加賀乙彦『湿原』上・壁 五二六⑬」

○フケ性なのか黒っぽい法服の肩にフケが一つ二つ光っている。「加賀乙彦『湿原』下・門三七二⑫」

○黒っぽい衣服を着た老人が壁にもたれて坐っていた。「倉橋由美子『生還』一一三⑧」

○そうだったでしょ、といわれてもるつ子は答えられない、ぼんやりとゆう子は白っぽくて和子は黒っぽかった、とだけしか記憶がないのだった。「幸田 文『きもの』一二四⑬」
げすっぽい「下種」

○そのむさぼりかたは夢中としかいいようがなくて、たったいま無言のうちに自分の好みに人間を従わせてやったという下種っぽい自負など、どこにもあらわれていない。「開高 健『花終わる闇』四七⑧」

○あばずれの下司っぽい女たちしか知らなかった武内は、一見おきやんそうに見えて、そのじつ言いたいことの半分も口に出せない、まだ娘っぽいところを残しているその女を好きになった。「宮本輝『道頓堀川』 四一⑩」

けちっぽい」

煙っぽい」

恋っぽい

○若いうちは、なんでも恋っぽく考えがちだよ。「幸田文『きもの』三三九⑭」

ごそっぽい

○ぐつと理解のいくものがって、縫い直しのごそっぽい銘仙「めいせん」より、お古でもしなやかな縮緬「ちりめん」のほうがいいと思うが、素直にはなれなかった。「幸田文『きもの』五八⑫」

こどもっぽい

○額に汗の玉、眼鏡が鼻の頭までずり落ちて、とてもこどもっぽい顔ですけれど、言うことはしつかりしていました。「久美沙織『MOTHER』 二七④」

○おまけに、ジョーのそばにいと、ケンがなんだか頼りなくこどもっぽく見えてしまします。「久美沙織『MOTHER』 二六五③」

子供っぽい

○新宿の旅館から荷物を持こんで来た葉子は、その当時壁紙など自分で張りかえた下の部屋に落ちついて、窓に子供っぽいカーテンを張り、二つの電球をもった、北海道時代から持ち越しの、例の仏蘭西製のスタンドも、こて／＼刺繍のある絹張りのシェイドに、異国の売淫窟を思わせる雰囲気を浮び出させるのであった。「徳田秋声『仮装人物』三二五⑩」

○津軽の北部に見受けられるような、子供っぽい悪あがきは無い。「太宰 治『津軽』 一四六⑯」

○最初は、部落全体に火をかけてやるとか、井戸に毒を入れてやるとか、罾を仕掛けて、責任者を端から穴のなかに引きずり込んでやるとか、そんな直接的な手段で、もっぱら空想に鞭うち、自分をはげまして来たものだが、いざ実行の機会をあたえられてみると、そう子供っぽいことばかりも言っていられない。「安部公房『砂の女』 一八二⑥」

○年若い西だけが子供っぽいほどの好奇心をみせ、はじめての船旅に胸はずませながら、私に船の構造や羅針盤の機能をたずねたり、エスパニヤ語を教えてほしいなどと話しかけてきた。「遠藤周作『侍』 八〇④」

○「いい年をして子供っぽいことをいってるわ。弁解にしても三流だよ。」「開高健『夏の闇』二四一⑰」

○彼らの陽気さ、多血質、おとなの体と子供っぽい衝動。そんなことについて話しあったあぐく人びとは彼らもまた遠からず畦道で撲殺される運命にあることをかぞえてみじめに自分を

暗がりにむかって解放するのだ。「開高健『流亡記』二二八⑤」

○同年の友達が街中で群れ集っているのが、子供っぽい、莫迦げたことに「加賀乙彦『湿原』下・寒郷一六六⑬」

○「随分、子供っぽい……いや、失礼、変った希望ですね。「加賀乙彦『湿原』下・門三八七⑭」

○ベッドのはしに腰をおろして手近の竿をとりあげてリールをまわしていた蔡は、写真と私を見くらべ、はじめてその眼から鋭さを消して子供っぽい驚愕をみなぎらせた。「開高健『貝塚をつくる』一八七⑬」

○いつまでも子供っぽい印象をあたえていた額は渋紙色に変って深い縦皺がきざまれ、ゴム鞠のようにふくらんでいた頬を内側からすつかりめぐりとられたように凹んで、前歯一本だけをのこして義歯をはずされた口はくろぐるとホラ穴のようにひらかれたままだ。「安岡章太郎『海辺の光景』一六②」

○子供っぽい表情で彼女は手を伸ばした。「吉本ばなな『血と水』」

○単純で子供っぽい奴みたいです。あんまり頭は良くないかもしれませんが。「久美沙織『MOTHER』一〇①」

○子供っぽい茶目っ気を感じて、彼女も思わず微笑を返した。「川西 蘭『ルームメイト』二五⑦」

○「なによ、それじゃ子供っぽいってことじゃない」「山浦弘靖『星宇宙二人旅』三三⑪」
○私はホツとしながら、われながら子供っぽく思える言い方で、俺には行く手の自爆がはっきり見えた、だからこれは義務だった、俺は義務を果たした、と呟きながら、歩いていたのです。

【小川国夫『悲しみの港』87】

○顔を覗き込まれるほど、なおなお深く首垂（うなだ）れて、滝十郎は、子供っぽく二三度合点々々をした。「多情仏心・初雪の夜、六三頁」

○「それがお友達ってものなの？」と女はつい誘われて子供っぽく言ったが、後はまた吐き出すように、「えらいと思うわ。よくそんなことが私にお頼めになれますわ。」「川端康成『雪国』一八⑥」

○「そう、変？ あれが私の子供っぽさの最後のとりでだったんだらうけれど、あれを隠していることに酔いながら、街を歩いてたような気がして。」「吉本ばなな『N・P』一七〇⑭」

粉っぽい

○林檎畑があつて、白い粉っぽい花が満開である。「太宰 治『津軽』一五六⑩」

○家の近所の薬屋は、入口のガラス戸に黄ばんだカーテンを引いていて、中はいつも秋の夕暮れのようにひんやりしていた。そして粉っぽく乾いたにおいが満ちていた。「小川洋子『冷めない紅茶』一〇②」

五味っぽい

○それと同時に五味っぽいような、酸っぽいような、胸の悪い匂いが籠み上げて来て、目の前に緑色の輪が見えた。「森鷗外・『諸国物語』馬丁三六四②」

サーファーっぽい

○きつちりスクエアにスーツを着たひと、サーファーっぽく陽にやけたひと、カウボーイ・ファッションのひともあります。「久美沙織『MOTHER』二二〇③」

寒っぽい

ざらっぱい

○埃は北風にのって、うしろの駄馬隊へふりかかった。私は、堀口と交代していたので、照銀を牽いていたが、埃が眼に入って困った。口もざらっぱいになったが、常歩にうつつて私はへとへとになった。「水上勉『日本の戦争』二六一頁」

○大黒屋とは較べるべくもない粗末な宿で、自分と同じ年恰好の少女が汲んでくれたすすぎの水で足を洗い、ふすまきしむ音のするざらっぱい階段を昇ると、襖仕切りの「津村節子『津村節子著作集』第五巻二〇六頁」

塩っぱい

しめっぱい

○こちらの隅にはりついているのは、しめっぱいベッドの中で、タバコの灰が落ちかけているのに、まだ薄目のまま身じろぎしようともしない、裸のあいつである。「安部公房『砂の女』二二四⑬」

○「晩方は池の方はしめっぱいごさいますね」と、アレクサンドラが云った。「森鷗外『諸国物語』馬丁三四二⑦」

○知の上の暗黒が次第に濃く、温かに、しめっぱいになって来た。「森鷗外『諸国物語』センツアマニ二四〇⑤」

○お客がしめっぱいなくなっちゃうでしようね。「開高健『夏の闇』一五〇③」

○ふとんは、ますますしめっぱい、砂は、ますます肌にべたつく。「安部公房『砂の女』

四一⑪」

○「こんな話ばかりじゃ、しめっぱいなくなっちゃうわ！ほんと」星子が叫んだ。「山浦弘靖

『星子宙太二人旅』二一④」

湿っぱい

○鹿が少なくとも五六疋、湿っぱいはなづらをずうっと延ばして、しずかに歩いているらしいのでした。「宮沢賢治『鹿踊りのはじまり』一一〇③」

○彼の今まで居た所は北向きの湿っぱい臭いのする汚ない室でした。「夏目漱石『こころ』二〇五⑮」

○彼は冷たい風の吹き通す土蔵の戸前の湿っぱい石の上に腰を掛けて、古くから家にあった江戸名所図会と江戸砂子という本を珍しそうに眺めた。「夏目漱石『門』一四四②」

○光沢(つや)のある髪で湿っぱいく押し付けられていた空気が、弾力で膨れ上がると、枕の位置が畳の上で一吋廻った。「夏目漱石『虞美人草』五一⑤」

○とうとう上映時間の終了まで、バネのぬけた湿っぱい椅子の上に坐ったまま、動くことができずにしまった。「安岡章太郎『海辺の光景』九〇⑥」

○手はポケットの中の湿っぱい紙幣をにぎりしめながら、古い堀割にそって歩いて行った。「安岡章太郎『秘密』二〇三⑩」

○が、僕がつかみ出したのはあの湿っぱい紙幣ばかりだ。「安岡章太郎『秘密』二一〇⑮」

○真夏にしては光の衰えた空に鼠色の膜をかぶった臓物のような雲が低く垂れ込め、羊水のような海は暗く騒ぐ気配を見せて、その間を吹いてくる風はひどく湿っぱい。「倉橋由美子『獣の夢』五一⑫」

○急に、麻子は湿っぱい声を出した。「内田康夫『湯布院殺人事件』五二⑥」

○帝大農学部ですぐ脇のこちら辺りは、二年前の震災で起こった火事からも運よく逃れ、明

治のころの落ち着いた家々の佇まいがしっとり残っているとされているが、ほんとうのところは、家の床から天井まで年中湿っぽくて、風通しも悪く、その上あたしには、この建物が坂下へ向っていくらか傾いているように思われてならない。「久世光彦『蕭々館日録』378下¹⁹⁾じゃがらっぽい」

少女っぽい

○由加子の机の上には、電気スタンドと小さな木箱、それに陶製の人形がひとつ置かれていて、私はいまでもそれらのどこか少女っぽい配置を思い出すことがあります。「宮本 輝『錦繡』 四一⁵⁾」

少年っぽい

○昨日のどんよりした濁りや、こわばった石灰質の殻はどこにもなく、すこし少年っぽい体つきはそのままだけど、会釈ぶりはもう娘ではなかった。「開高 健『花終わる闇』五八¹²⁾」

○彼女は淡々としたそぶりや、しかしとらえようのない執拗さをこめて一箇ずつとりだし、カーペットへ順々に並べていった。少年っぽい、とがった、白い裸の尻の割れ目から漆黒の毛の穂さきをちらつかせつつ彼女があらこちらと歩きまわる姿には、悪戯の精のようなどころがあったが、とうとう部屋の床が眼鏡で足の踏み場もなくなってしまった。「開高 健『花終わる闇』六五⁷⁾」

素人っぽい

白っぽい

○この男の白っぽい顔や黄いろい髪と、死だのなんのと云う、深刻な、偉大な思想とは、いかに不吊合いに感ぜられたからである。 森鷗外・『諸国物語』死三〇二¹⁰⁾」

○海女の裸身が、底の方にある時は、青い水の層の複雑な動揺のために、そのからだがるで海草のように、不自然にクネクネと曲がり、輪郭もぼやけて、白っぽいお化けみたいに見えるが、それが、スーツと浮き上がってくるにしたがって、水の層の青さがだんだん薄くなり、形がハッキリしてきて、ポツカリと水上に姿を現わすその瞬間、ハッと眼が覚めたように、水中の白いお化けが、たちまち人間の正体を暴露するのである。「江戸川乱歩『押絵と旅する男』二八一⁷⁾」

○がそこへ、突然、花火でも打ち上げた様に、白っぽい大空の中を、赤や青や紫の無数の玉が、先を争って、フワリフワリと昇って行ったのでございます。「江戸川乱歩『押絵と旅する男』」

○ふと南の浦のほうを見たら一羽の鴨が白っぽい胸をみせて低く舞っていた。「中 勘助『島守』一〇八⁹⁾」

○トラックがまきあげる埃のために、紳士服御用と書いたペンキも、ショオウインドオの硝子もすっかり白っぽい。「遠藤周作『海と毒薬』 四²⁾」

○白っぽい、ふわふわする球形の心が針の山に乗り、傷つけられ血を流している。「加賀乙彦『湿原』上・闇 三八一¹²⁾」

○ただ一つ残っているのは、多年の風雨に木材の白っぽくささくれた、ささやかな鐘楼ばかりである。「江戸川乱歩『もくず塚』三六四²⁾」

○帽子のない頭は毛が薄くて白っぽく、それが日焼した顔に特殊な帽子をかぶせたようで愛敬があった。「加賀乙彦『湿原』上・流氷二九二⁵⁾」

○唇を固く結んだレオの顔は、そそけ立ったような頬が白っぽく、艶を失くしている。「森

茉莉『枯葉の寢床』一九〇⑮]

○木目が黒く浮き上がって、低いところは白っぽくけばだっている廊下は、人が歩くたびにみしみし言ったりしている。「森茉莉『ポッチチェリの扉一〇⑦』」

○分厚く層になった部分は、擦れて白っぽくなりツヤを失っているが、そのまわりには濡れたままのような光沢のある個所をのこしている。「安岡章太郎『海辺の光景』七〇⑦」

○そうだったでしょ、といわれてもつ子は答えられない、ぼんやりとゆう子は白っぽくて和子は黒っぽかった、とだけしか記憶がないのだった。「幸田 文『きもの』二二四⑯」

○三好が故意（わざ）と足もとをひよろつかして立ち上がりながら、「どうしても、門弟何の某だな。白っぽい袴の下から向脛を出してる輩（てあい）だな」「多情仏心・初雪の夜、七一頁」

皺っぽい□

煤っぽい□

砂っぽい

○夏の終りの午後の光の中で、東大の赤い煉瓦と、砂っぽい舗道とが乾いている。「森茉莉『日曜日には僕は行かない』二五一⑥」

戦争っぽい

○もともと、こんな乱暴っぽい、戦争っぽい雰囲気は好きじゃありません。「久美沙織

『MOTHER』二六五⑩」

先輩っぽい

○少年野球チームでも、だんだん先輩っぽくなって来るじゃん。「久美沙織『MOTHER』一

八二⑪」

俗っぽい

○雪森厚夫と結婚の話などしたことがなかったし、それを母に対して口にするので、結婚という言葉が、ひどく俗っぽい響きを帯びてきたからだ。「加賀乙彦『湿原』下・門 四〇

九②」

それっぽい

○わあん、ないない。鞆の中身くらい整頓しておいてよお。あ…さわった…それっぽい…あった！」「久美沙織『MOTHER』四九⑦」

探険っぽい

○私は言った。「探険っぽいわ。」「吉本ばなな『N・P』一四七⑥」

茶色っぽい

○三人とも化粧をしていて、一人は髪が茶色っぽい。「干刈あがた『黄色い髪』夏休み五九③」

茶っぽい

○茶っぽい色をした、濃いが周囲のぼやけた眉である。「森茉莉『ポッチチェリの扉』」

○妙に茶っぽい顔付で風采あがらぬのはいいとして、勤務態度がよい加減、とくに時間を守らないのが、親弁たる彼の気に触っていた。「加賀乙彦『湿原』下三六四②」

○艶のある茶っぽい髪が、犬が臥た跡の草むらのように、なっている。「森茉莉『恋人たちの森』八〇⑬」

○仲間の少年といたずらにペイ煙草をやったために、茶っぽい瞳の中の黒褐色の瞳孔が、ど

こか夢みるように定まらないところがある。「森茉莉『枯葉の寢床』一六九⑩」
ちやらっばい

○チャラっばい男にばっかなぜか惚れちゃうわたし……何度も泣いた心配だった他のどこかに行かないで♪「つくく作詞『浮気なハニーパイ』2003年7月15日発売」
中年女っばい

○ちよっと中年女っばい抑揚でいい、それもいやらしい拗ねてひがんだ。「田辺聖子『風をください』二八⑪」

艶っばい

○脱顛子少しもひるまず、古今獨歩一流の艶ッばい所を聞てからの御評判、浪花節ごとき野鄙のものにあらざ、歌は八宗兼学の妙文句、サア初まツたり／＼。「幸田露伴『日ぐらし物語』四四①」

○無論小六よりも御米の方が年上であるし、又従来の関係から云っても、両性を絡み付ける艶っばい空気は、箝束的な初期に於てすら、二人の間に起り得べき筈のものではなかった。「夏目漱石『門』八九⑥」

○二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうちに成人したために、そういう艶っばい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇気がないのだろうと考えた。「夏目漱石『こころ』三五⑩」

○何気ないらしいが、胸の苦悩が現れた、白眼に剥いた鋭い眼が偶然陳のいる辺りに止められ、脣じりは上つたままのギランのひどく艶っばくもみえるかおに、陳は狼狽え、吃りながら、「宝石の御用はどうぞ、今まで通り……」ギランははっと気がついたように、陳の顔に焦点を

当てた。「森茉莉『枯葉の寢床』一八五④」

露っばい□

逃避っばい

○「ちよつとゴツシク調で、うんざりするようなシリアスさで、ロマンチックで、逃避っばくもあり。結局、染ったものとしては咲のアプローチが一番まともじゃないかしら。」「吉本ばなな『N・P』九七⑨」

毒っばい□

とっばい

○いいかげんあことをいっているぜ、雪がとけてみたら木がまる裸になってたんでびっくりしたなんてトッポイことをヌケヌケ書いている。「開高健『パニック』三二⑥」

ドラマっばい

○「〜ドラマっばいのと、おもわせぶりなのは苦手なんだから。」「吉本ばなな『N・P』七〇⑬」

夏っばい

○「もう、夕空が夏っばいわね。」咲が言った。「吉本ばなな『N・P』四一⑨」

涙っばい□

苦っばい

○味が舌先から苦っばくくなってきたが、栄養をつけたいという一心で最後の一滴まで飲みこんだ。「加賀乙彦『湿原』上・闇三七〇⑫」
濁りっばい

○夜来の雨に潤った新緑の鮮やかな庭木が、きら／＼光って、底ふかい空の青さにも翳しかなかったが、心臓の弱い庸三はいつもこう云う場合の癖で、ひどく濁りっぽい気持ちになっていた。「徳田秋声『仮装人物』二二八^⑭」

濡れっぽい□

鼠っぽい

○両耳が押し曲げられるほど深く阿弥陀に被り、鼠っぽい厚羅沙（らしや）の、やつと膝まであるかなしの外套（オーヴァ）に、やや流行おくれの空色がかった背広を着た美少年だった。「里見とん『多情仏心』一二一頁」

熱っぽい

○郊外のホテルの或る一夜その物狂わしい場面を思い出す前に、庸三は或日映画好きの彼女に誘われて、ちようど其日は雨あがりだったので、高下駄を穿いて浅草へ行く時、電車通りまでの間を、背の高い彼女と並んで歩くのも気がひけて「僕は自動車に乗りませんから」と断つて電車に乗ってからも、葉子が釣革に垂下りながら先生々と口癖のように言って何かと話かけるのに辟易したことだの、映画を見ているあいだ、そつと外套の袖の下をくぐって来る彼女の手に触れたときの狼狽だの、或日ふらりと彼女の部屋を訪ねると、真中に延びた寢床のなかに、**熱っぽい**顔をした彼女がいて、少し離れて座った庸三が、今にも起き出すかと待っていると、彼女は赤い毛の肌著だけで、起きるにも起きられないことが漸と解って照れているうちに、畳のうえに延べられた手に顔をもつて行くと、彼女は微声で耳元に「行くところまで……」とか何とか言ったのであったが、彼はそういう風にして悪戯半分には彼女に触れたくはなかった事、一夜彼女が自分が果して世間でいうような悪い女か何うかの判断を求めるために、初めから不

幸であった結婚生活の破滅に陥った事情や、実家からさえも見放されるようになった経緯、それに最近の草葉との結婚の失敗などについて、哀訴的に話しながら、止度もなく嗚咽いた後で、英国の或る老政治家と少女とのロオマンスについて、彼女独特の薔薇色の感傷と熱情とで、恰かもぼつと出の田舎ものの老爺に、若い娘がレヴュウをでも案内するような塩梅で長々と説明して聴かした事なども思い合されるのであったが、或日の午後彼はふと原稿紙やペンやインキを折靴につめて、差当つての仕事を片著けるために、郊外の其のホテルへ出ようとして、ちようど遊びに来ていた葉子を誘ってしまったのであった。「徳田秋声『仮装人物』二一七^⑫」

○凶暴なものがふとちらつくことのある彼の眼の底に、**熱っぽい**人懐っこさが隠れているのを、由里は見付けていた。「森茉莉『ポツチチェリの扉』一三三^⑧」

○**熱っぽい**蒲団の中で彼の頭にうかぶのは、実行には決してうつらないさまざまな自殺の手法や、それについての夢のような考えばかりだった。「安岡章太郎『海辺の光景』五六^③」

○いかにそれが真剣な**熱っぽい**思いであったにしても、私はまだ十四歳の子供でしかなかった。「宮本 輝『錦繡』三七^①」

○家全体が疲労の色に包まれ、日常生活のあらゆるディテールは混沌として、無秩序にくっつき合いながら重苦しく、**熱っぽく**流れて行った。「安岡章太郎『海辺の光景』七七^⑪」

○案の定、翌朝は少し**熱っぽく**、のどが痛んでいた。「川西 蘭『ルームメイト』七四^④」
ねむっぽい□

ノイローゼっぽい

○「ちよつとノイローゼっぽくなるときがあつたでしょ、全員が。」「吉本ばなな『N・P』

二一^⑧」

腹立ちっばい
ひがみっばい

○そうひがみっばくではこまるわねえ。「田辺聖子『風をください』一三④」

僻みっばい

○彼は自身の子供じみた僻みっばい魂情を、いくらか悔いてもいたが、兎角苦悩と煩いの多い此の生活を、一気に叩きつけるのも、彼女に新らしい恋愛もまだ初まっていない、こんな時だという気もしていた。「徳田秋声『仮装人物』二一九②」

○「ところで、細君の実家はどこだったかな」「紀州の新宮だ」「佐藤春夫と同郷か。僻(ひが)みっばいだろ」迷々さんは、人の話をはぐらかすのが趣味である。「久世光彦『蕭々館日録』380上⑫」

皮肉っばい

○真子は皮肉っばく言い、人形に打ち込んでいる夏は炎暑にも気付かなかったほどなのにと思った。「芝木好子『面影』」

○「礼には及ばぬ。かねて申した通り、ただ当方も大船を造るからには望みがある」と白石さまは皮肉っばく笑われた。「遠藤周作『侍』三七⑩」

○「もともと人間どもには大したことなんかできはしません」とヘルメースは皮肉っばく笑って言った。「倉橋由美子『発狂』八三⑰」

○ロイドの唇が皮肉っばく震えます。「久美沙織『MOTHER』三〇四⑧」

秘密っばい

ピンク色っばい

○スノーマンの教会の部屋では、ベッド・カバーだってカーテンだってピンク色っばい生地を使っていました。「久美沙織『MOTHER』一五八③」

不機嫌っばい

○膨らんだ唇を小生意気に結んで、不機嫌っばい顔で讓次をみてゐたのが「森茉莉『或殺人』」不良っばい

○その眼は不良っばい、気の無いものを浮べて、傍見をしてゐた。「森茉莉『恋人たちの森』」
○私より少し背が高く、ふつうのショートカットの髪で、紺色のダッフルコートを着た子で、不良っばくは見えなかった。「干刈あがた『黄色い髪』二〇三②」

○梨枝の眼がパウロに還った時、パウロはナフキンで唇を拭いていたが、不良っばい、気の無いものを浮べて、傍見をしていた。「森茉莉『恋人たちの森』一一八③」

ブルースっばい

○少しカントリーがかかったかわいい部屋、もしくはブルースっばい乾いた部屋、このどっちかだろうと歩きながら推測した。「吉本ばなな『N・P』九九⑥」

勉強の虫っばい

○ひとりっ子で、勉強の虫っばくて、かなり、おかあさんっ子だったからね。「久美沙織『MOTHER』三二四⑤」

保護者っばい

○保護者っばいあなた。「吉本ばなな『N・P』一九七⑩」
ほこりっばい

○ビルの設計に関する私の交渉相手、総務部長、製本のいい古本のような男、角ばっていて

ほこりっぽい男。「安部公房『無関係な死』一一〇②」

○私は、ある場末の、見るかぎりどこまでも、どこまでも、まっすぐにつづいている、広い、ほこりっぽい大通りを歩いていた。「江戸川乱歩『白昼夢』九⑩」

埃りっぽい

○店に入ってみると埃りっぽくもなく、垢じみてもいず、開店してあまり時間がたっていないらしい気配である。「開高健『珠玉』一一九⑪」

埃っぽい

○私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。「梶井基次郎『檸檬』一四⑭」

○けれど格子からのぞいてみると、薄暗く埃っぽい闇のなかに、ひげを土まで垂らした関羽が稚拙に怒ったまなざしで佇んでいた。「開高健『岸辺の祭り』一一八⑥」

○千メートル林道は、埃っぽい。車がちょうど擦れ違えるくらいの幅で、車に出会うと腹が立ってしまう。「後藤明生『吉野大夫』一一四⑤」

○こゝは水に臨んでいるというだけでも、部屋へ入った瞬間、誰でもちよつと埃っぽい巷から遠ざかった気分になるのであったが、庸三達には格別身分不相応というほどの構えでもなく、文学にもいくらか色気のある小夜子を相手に無駄口をきゝながら、手軽に食事などしていると、葉子事件に絡む苦難が、いくらか紛らわせるのであった。「徳田秋声『仮装人物』一四三⑪」

○白く粉をふいた黒い肌をふるわせて立っているゴム長靴、埃っぽいラシャ地の上にウジャウジャとでたために置かれながら同じ時刻に針を指しうごいている時計の山、そのとなりには、魚の卵、タクワン、樽の中にぶつぶつ泡をふいて澱むイカのハラワタ、……そんなものに僕は

蹴つまずきそうになるのだが、何ひとつ僕に呼びかけてはこない。「安岡章太郎『秘密』二〇四⑰」

○そして店の飾窓には、いつもの流行おくれの商品が、埃っぽく欠伸をして並んでいるし、珈琲店の軒には、田舎らしく造花のアーチが飾られて居る。「萩原朔太郎『猫町』」

骨っぽい

○骨っぽいからだをボキボキ鳴らしながら降りてきたのは、白い眉、白い髭、見るからに元飛行機乗りのかっこうをしたおじいさんだったのです。「久美沙織『MOTHER』一一六⑭」

○私利私欲のためではなく、是々非々の筋を通して自己の主張を枉げない骨っぽい人物が、土佐から輩出している。「萩谷朴『おもしろ奇語辞典』三〇上⑤」

○司書は、背の高い痩せた中年女性だった。皺だらけで骨っぽい指には不似合いの、ローズ色のマニキュアが生々しく光っていた。「小川洋子『冷めない紅茶』七四①」

ほれっぽい

○本当にいつになっても星子のほれっぽい性格は直らないようだ。「山浦弘靖『星子宙太二人旅』三八②」

惚れっぽい

まじっぽい

水商売っぽい

○踊り子になって三か月目の頃、今は別のトップレス・バーに移った悠子たちと店の踊り子五人で香港へ食べ歩きの旅をしたり、熱海や大島に一泊旅行をよくしたが、取りまとめ役の悠子が他所に移ったし、残りの踊り子の出身がクラブやキャバレーのホステスだったので、電

車の中も旅館に着いてからも話題は水商売ぼつく歌舞伎町のクラブのママの話や客筋の品定め
に終始し、あげく出かけていった熱海の温泉宿の芸者たちから、「お客さんたち、おミズでし
よう」と言われ、真知子や順子は鼻白んだ。「中上健次『軽蔑』25 朝日新聞連載一九九一年三
月九日(土)」

水っばい

○その水っばい鼻声は、男をまぶしがらせた。「安部公房『砂の女』一九七④」

○肉の入っていない、水っばいカレーライス。実にカレーライスの多い所だ。「加賀乙彦『湿
原』上・壁 四七三⑥」

○影に細い手と足がついたといいたくなるような枯れかただが、穢れた壁にもたれたところ
を見ると、青い瞳が薄れて水っばくなり、淡い輪郭の線がのこっているだけである。「開高健
『珠玉』 九〇⑬」

○あちらこちらに水っばい贅肉のついた、ぶざまに腹のせりだした初老の体をそのかたわら
によこたえる。「開高健『珠玉』一四六③」

未亡人っばい

○何でだか未亡人っばく見えた。昔から、そういう外見をしていた。「吉本ばなな『N・P』
一三三⑩」

むかっばい」

娘っばい

○その娘っばい眼や頬にのぼる哀傷を見て久瀬は頹れる冷酷をおぼえ、はげしく踏みこんだ。
「開高健『岸辺の祭り』九二④」

○あばずれの下司っばい女たちしか知らなかった武内は、一見おきやんそうに見えて、その
じつ言いたいことの半分も口に出せない、まだ娘っばいところを残しているその女を好きにな
った。「宮本輝『道頓堀川』 四一⑫」

○敷居際で三っ指ついて、「いらっしやいませ」とお辞儀をする様子は、いかにも日本的で
落ち着いてみえるけれど、視線を上げると瞳がキラキラ輝いて、娘っばいのおの見えるよう
な、陽気で少しやんちゃな感じもする女性だった。「内田康夫『湯布院殺人事件』七八⑫」

咽せっばい

○どうも咽せばくて実に弱った。「夏目漱石『吾輩は猫である』」

紫っばい

○紫っばい錦紗である。「田辺聖子『風をください』二五七①」

無理っばい

○「やめてくれよ。縁起でもない」ロイドが、少々無理っばい声で笑いました。「久美沙織

『MOTHER』八八⑩」

瞑想っばい

○「無心にね……読経とか瞑想っばいのかな。」「吉本ばなな『N・P』一三八①」

やくざっばい

○管理人が留守を伝えると居留守にちがいないとさんざん嫌味を言い、約束を破ったとかな
んとか、思いつきやくざっばい調子でわめくのだ。「安部公房『無関係な死』一七九⑮」

○無理矢理やくざっばい品を作ろうとしているようだった。「宮本輝『道頓堀川』一九④」
安っばい

○宗助は次の間にある亜鉛の落しの付いた四角な火鉢や、黄な安っぽい色をした真鍮の菓籠や、古びた流しの傍に置かれた新し過ぎる手桶を眺めて、門へ出た。「夏目漱石『門』一五〇^⑫」

○安っぽいくらいあたりまえに哀しい、内面の物語を。「吉本ばなな『N・P』一五二^⑬」
○言葉って安っぽい。「吉本ばなな『N・P』一九六^⑩」

○「この男、『小説を自分の頭の中で映画を撮るようになって読む』というとてもない男で、まあ最近そういう読み方で充分という小説がたくさんあるからこれはいいとして、そういう読み方をした時、パーティ・シーンにリアリティがない、登場人物に動きが少ない、安っぽい書き割りしか浮かんでこないなどと難癖をつけはじめた。「筒井康隆『朝のガスパール』¹⁰³」

○「楽屋に対する興味」などと云う言葉が、安っぽく考えられた。「多情仏心・前編八、三七頁」

易っぽい

○其の晩の舉動なり、……あの餘り……貴方の前ぢやけれどもが、風采の上らん、痩せた、薄鬚のある、背の屈んだ、恚う、突くとひよろひよろつとしさうな、人に口を利くにおどくする、初心らしい、易っぽい、容子と云ふのがぢやね、人品備はらんですぢやらうが、何うですかね、……きやツ、きやツ、きやツ。」空咳きに咳入る如く、肩を揺つて高笑ひをする。

「泉鏡花『日本橋』二〇九^⑩」

幼稚っぽい

○こんな幼稚っぽくなってしまった髪に、せめて、小さな花のいくつかくらいオトメチックに飾りたい。「久美沙織『MOTHER』七一^③」

汚れっぽい

乱暴っぽい

○もともと、こんな乱暴っぽい、戦争っぽい雰囲気は好きじゃありません。「久美沙織『MOTHER』二六五^①」

理屈っぽい

○……雪森厚夫という男の性格は、表面上は人当たりがよく、ちよつと理屈っぽいところが落ち着いて見え、初めは善人で学校の先生みたいに思われて信用されるのですが、元来飽きっぽく気が変りやすいのです。「加賀乙彦『湿原』上・閨 三九二^⑫」

○それはパーティというより十八世紀のサロンか平安朝の宮中の花の宴か、あるいはアテナイ人のシュンポシオンのようなものだなと麻衣子さんが理屈っぽいことを言ったはずはないので、そんな風に木原氏の想像が勝手に働いただけのことかもしれない。「倉橋由美子『幽霊屋敷』六三^③」

○そこで飛び出すことになっている。何事も理屈っぽく、数学的に物を考える末造が為めには、お常の言っている事が不思議でならない。「森鷗外『雁』八〇^⑭」

○理屈っぽく言えば、地球ぐらい大きくなれば、もう三次元の世界じゃなく、本当は四次元の世界で、その形を目で見るように想像すること自体がもう不可能かもしれないのだ。「安部公房『無関係な死』五四^⑨」

ロリータっぽい

○「単にロリータっぽいっていうんじゃなくって、おしまいのほうなんて、菓やお酒のせいなのか、ものすごく幻想的でしょう?」「吉本ばなな『N・P』三二^④」

忘れっぽい

○「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならないでしょう」と寒月君が笑うと、「夏目『吾輩は猫である』」

○「あいつは、過去のことをよく覚えてないんで、言うことがふわふわ変り、つまり根は忘れっぽいんです。努力して覚えようしたとこだけ、記憶しちよる。アリバイ工作のあとで歴然で」「加賀乙彦『湿原』上・闇 三九二^⑱」

○私はいそいでいた。「忘れっぽい小説家ですよ、私は」スン氏はいたずらっ子のように微笑した。「開高健『飽満の種子』一六〇^⑳」

○忘れっぽいモズがあちらこちらの枝につき刺した子ネズミの死骸に彼は眼を奪われたのだった。「開高健『パニック』一三三^㉑」

○「そんな風に云われちア恥入りますよ。……一体あたしは忘れっぽい質のところへもって来て、何しろ旧いはなしですからね。……どうもすみません」「多情仏心・初雪の夜、八九頁」

○「どうしてあたしはこう忘れっぽいかな」「多情仏心・初雪の夜、九一頁」

参考文献

安部公房 砂の女「新潮文庫」、無関係な死・時の崖「新潮文庫」

泉 鏡花 日本橋（「日本橋」大正三年九月十八日発行・名著復刻全集近代文学館）

内田康夫 湯布院殺人事件「中央公論社」

江戸川乱歩 屋根裏の散歩者、押絵と旅する男、防空壕、もくず塚「ちくま日本文学全集・

筑摩書房〇一九」

遠藤周作 侍「新潮文庫」、海と毒薬「新潮文庫」

小川国夫 悲しみの港「朝日新聞社」

小川洋子 冷めない紅茶「ベネッセ」海燕一九九〇年五月

尾崎紅葉 多情多恨「岩波文庫」

開高 健 夏の闇、巨人と玩具、歩く影たち（飽満の種子、岸边の祭り、怪物と爪柳枝）

パニック・裸の王様、花終わる闇「新潮社文庫」、珠玉「文藝春秋」

加賀乙彦 湿原（上・下）「朝日新聞社」

梶井基次郎 檸檬「新潮文庫」

川西 蘭 ルームメイト「集英社文庫」

川端康成 雪国「新潮文庫」

久世光彦 蕭々館日録「雑誌」中央公論「1999・11」

久美沙織 MOTHER「新潮文庫」

倉橋由美子 倉橋由美子の怪奇掌篇（発狂、幽霊屋敷、獣の夢、月の都）「新潮文庫」

幸田 文 きもの「新潮文庫」1965年「新潮」

幸田露伴 日ぐらし物語「岩波文庫」

後藤明生 吉野大夫「中公文庫」

小林多喜二 蟹工船「岩波文庫」

里見 淳 多情仏心「岩波文庫」

三遊亭圓朝 鹽原多助一代記「明治文学全集二〇・筑摩書房」

- 太宰 治 人間失格「新潮文庫」、津軽「新潮文庫」
 田辺聖子 風をください「集英社文庫」
 筒井康隆 朝のガスパール「朝日新聞社」
 津村節子 津村節子自選作品集・第五卷「岩波書店」
 徳田秋声 仮装人物「講談社文芸文庫」
 中上健次 軽蔑「朝日新聞社」
 中 勘助 島守「岩波文庫」
 夏目漱石 吾輩は猫である「複製」、門「新潮文庫」、虞美人草「新潮文庫」、こころ「ちくま文庫」
 ま文庫」
 萩原朔太郎 猫町
 千刈あがた 黄色い髪「朝日新聞社」
 三浦綾子 塩狩峠「新潮文庫」
 水上 勉 日本の戦争「新日本出版社」
 宮沢賢治 注文の多い料理店（鹿踊りのはじまり）「新潮文庫」
 宮本 輝 道頓堀川「新潮文庫」、錦繡「新潮文庫」
 森 鷗外 雁「新潮文庫」、諸国物語〔上下〕「筑摩文庫」
 森 茉莉 恋人たちの森（ボツチチェリの扉，枯葉の寝床，日曜日には僕は行かない）「新潮文庫」
 潮文庫」
 山浦弘靖 星子宙太二人旅「集英社」
 安岡章太郎 海辺の光景（秘密）「新潮文庫」

吉本ばなな N・P「角川文庫」、キッチン「福武文庫」、血と水□

▲上部へ

▲「言葉の泉」のページへ

◎「情報言語学研究室」のページへ